九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Thrombocytosis in asplenia syndrome with congenital heart disease : A previously unrecognized risk factor for thromboembolism

山村, 健一郎

https://hdl.handle.net/2324/1398447

出版情報：九州大学, 2013, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（4）

KYUSHU UNIVERSITY

氏名・(本籍・国籍)	やま むら けんいちろう **山　村　健一郎**（広島県）
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	医博乙第２６７２号
学位授与の日付	平成25年8月31日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位論文題目	Thrombocytosis in asplenia syndrome with congenital heart disease : A previously unrecognized risk factor for thromboembolism（先天性心疾患を伴う無脾臓症候群における血小板数増多－認識されていなかった血栓塞栓症の危険因子－）
論文調査委員	（主　査）教　授　砂　川　賢　二 （副　査）教　授　富　永　隆　治　　教　授　北　園　孝　成

論　文　内　容　の　要　旨

背景：脾摘手術後には、血小板数増多や血栓塞栓症がみられることが報告されている。しかしながら、先天性心疾患を伴う無脾症候群において、血小板数増多の有無と血栓塞栓症との関連性を検討した報告は過去にない。

方法：1997 年から 2010 年までに当施設で心臓カテーテル検査を施行した単心室症 161 例を対象とした。症例は無脾症候群を伴う A 群(46 例)と伴わない B 群(115 例)にわけた。肺動脈絞扼術以外のすべての手術の術後には、抗血小板薬としてアスピリンを投与した。7 段階の心臓カテーテル検査（初回姑息手術前・後、グレン手術前・後、フォンタン手術前・後、およびフォンタン手術遠隔期）における、血小板数、血栓塞栓症の頻度、他の血栓塞栓症の危険因子について、後方視的に検討した。

結果：血小板数の中央値は、全 7 段階のカテーテル検査において、A 群の方が B 群より高値であった（$p<0.002$）。血栓塞栓症の頻度も、A 群の方が B 群より高かった(28% vs. 10%, $p=0.030$)。単変量解析、多変量解析の結果、初回カテーテル検査における血小板数が 55×10^9/L 以上であることが、血栓塞栓症の発症と有意に相関していた(オッズ比 3.17; $p=0.046$)。

結論：無脾症候群では、段階的手術から遠隔期を通じて一貫した血小板数増多がみられる。複雑心奇形を伴う無脾症候群において、血小板数増多が血栓塞栓症に大きく関与している可能性がある。

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

（背景）

脾摘手術後には、血小板数増多や血栓塞栓症がみられることが報告されている。しかしながら、先天性心疾患を伴う無脾症候群において、血小板数増多の有無と血栓塞栓症との関連性を検討した報告は過去にない。

（方法）

1997 年から 2010 年までに当施設で心臓カテーテル検査を施行した単心室症 161 例を対象とした。症例は無脾症候群を伴う A 群（46 例）と伴わない B 群（115 例）にわけた。肺動脈絞扼術以外のすべての手術の術後には、抗血小板薬としてアスピリンを投与した。7 段階の心臓カテーテル検査（初回姑息手術前・後、グレン手術前・後、フォンタン手術前・後、およびフォンタン手術遠隔期）における、血小板数、血栓塞栓症の頻度、他の血栓塞栓症の危険因子について、後方視的に検討した。

（結果）
血小板数の中央値は、全 7 段階のカテーテル検査において、A 群の方が B 群より高値であった（$p<0.002$）。血栓塞栓症の頻度も、A 群の方が B 群より高かった（28% vs 10%, $p=0.030$）。単変量解析、多変量解析の結果、初回カテーテル検査における血小板数が 55×10^9 /L 以上であることが、血栓塞栓症の発症と有意に相関していた（オッズ比 3.17; $p=0.046$）。
（結論）
無脾症候群では、段階的手術から遠隔期を通じて一貫した血小板数増多がみられる。複雑心奇形を伴う無脾症候群において、血小板数増多が血栓塞栓症に大きく関与している可能性がある。
以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。
よって、調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。